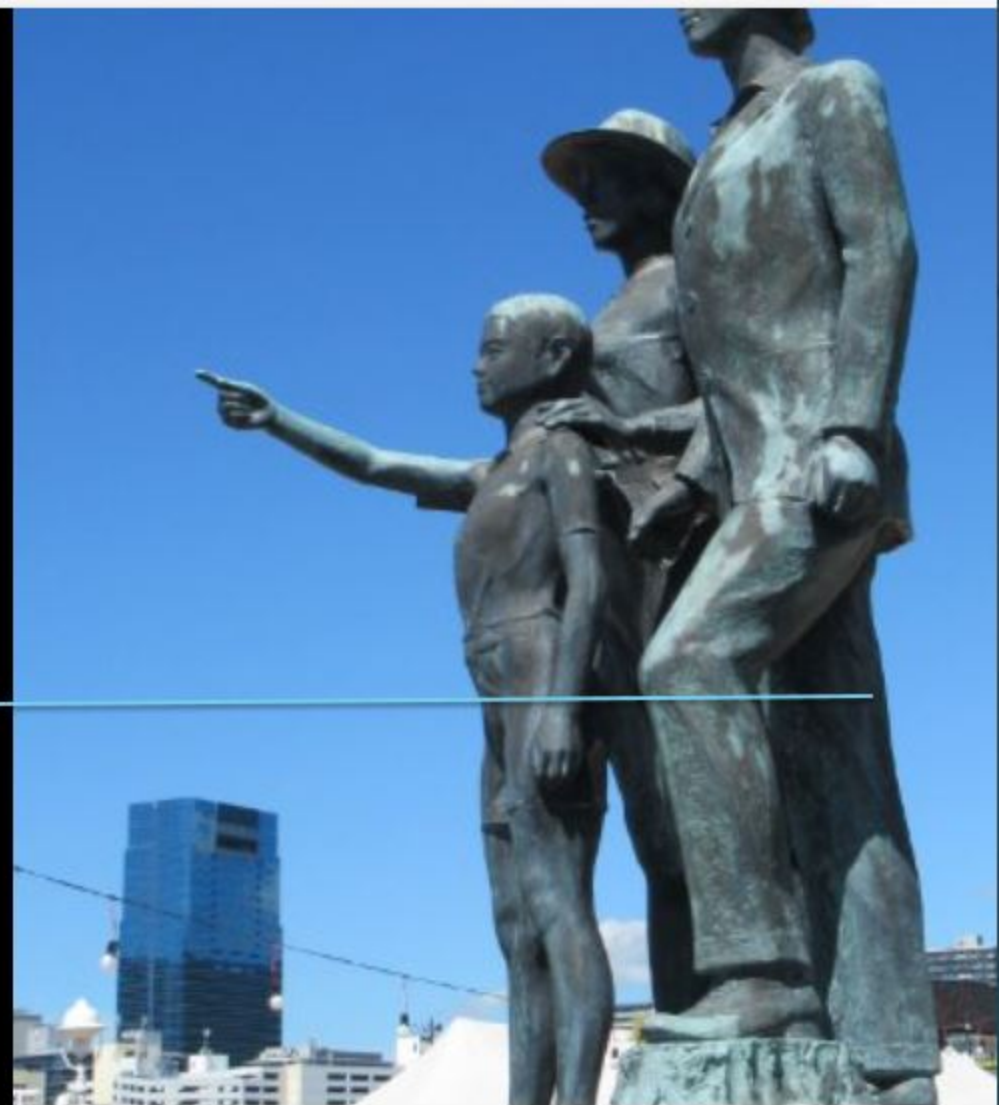


# "苦潮世、 の旅路

奄美近現代の出稼ぎ・移民考



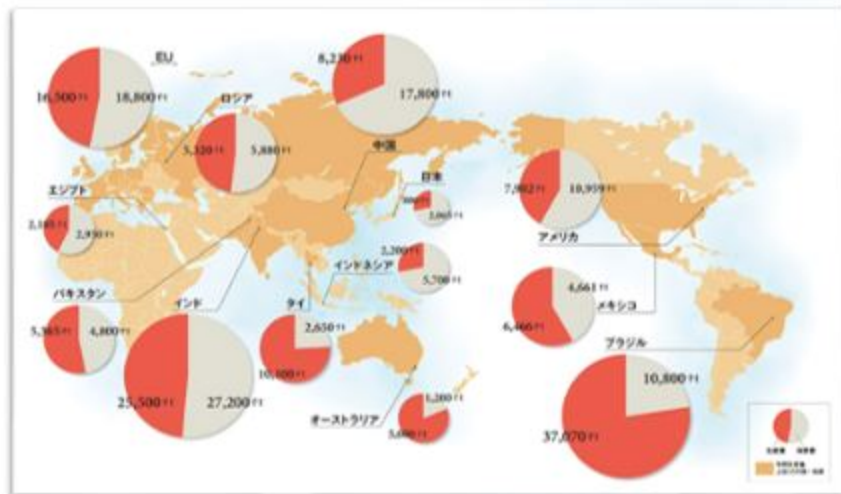
# 「甘い砂糖」が広げた「苦い世界」



- ★砂糖は世界110か国以上で、年間1億9千万トン前後生産されている
- ★ブラジルとインドが世界一を争う生産大国で、日本は18位の200万トン
- ★砂糖の1人当たり消費量(2022)は日本で15.3gキロ。(世界平均22.1キロ)

▶インドネシアを発祥とする砂糖は、コロンブスの新大陸発見(1492)後、16世紀に入るとブラジル、カリブ海の島々で大規模なサトウキビ栽培を展開。ヨーロッパに輸出され、産業革命で量産化に成功すると、急速に世界に普及した。

日本へは古くから大陸から薬品として入っており、江戸初期、琉球で最初に砂糖の製造が始まり、やがて奄美大島、喜界島、徳之島で薩摩藩が専売生産。近代には台湾糖が主流になり、食品・aに調味用に多用された。



## 悲惨な奴隷貿易の実態

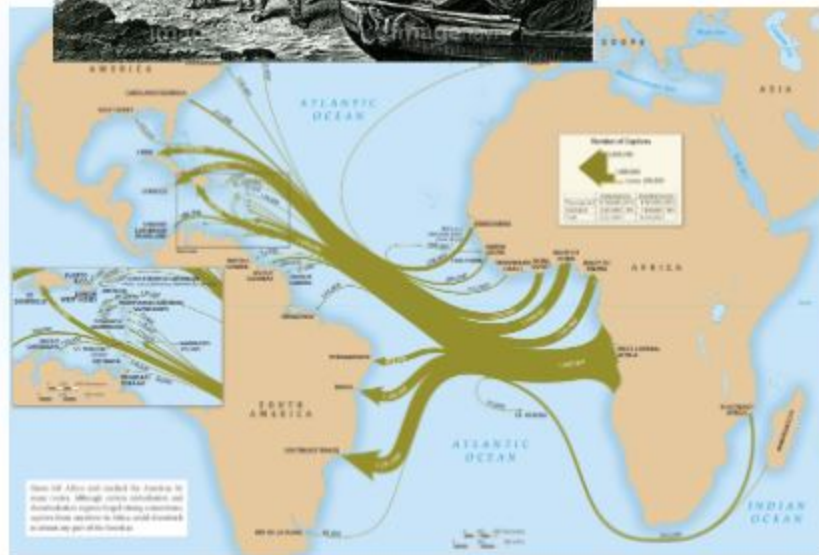


# 砂糖生産を支えた 黒人奴隷の犠牲

▶15世紀、大航海時代によって大西洋など新たな交易ルートを開拓したヨーロッパ勢力は、金銀に加え、砂糖、茶、コーヒー、綿花を獲得、それまでの地中海交易に代わって飛躍的繁栄を遂げた。

▶ポルトガルが獲得したブラジルでは、砂糖の原料サトウキビ栽培が行われており、茶やコーヒーの普及で需要が急増。西インド諸島に栽培地を拡大したが、酷使や病疫でインディオが激減。アフリカから黒人奴隷を投入し、新たな労働力として使役した。

▶18世紀に入ると、イギリスなどが武器や日用品をアフリカに輸出、その決済に黒人奴隷がカリブ海やアメリカ大陸に運ばれ、その地で得た国際商品を母国に送る、大西洋をまたいだ三角貿易が展開された。



# 「砂糖のあるところ奴隷あり」



## エリック・ウィリアムズ

(1911 - 1981) カリブ海にある島国トリニダード・トバゴ共和国の政治家・初代首相。宗主国イギリスのオックスフォード大で歴史学を専攻。アメリカに転じて1947年までハーワード大学教授。翌年帰国、トリニダード独立運動に参加。国家への多大な貢献から「トリニダードの父」と呼ばれている。



- ◆ 15世紀に始まる大航海時代は、ヨーロッパに富と繁栄をもたらす一方、奴隷狩りがあったアフリカの破壊と、中南米など植民地地域の犠牲を強いた。
- ◆ カリブ海域のトリニダード・トバゴもコロンブスの発見以降、スペイン、イギリスと植民地時代が続き、黒人奴隷を主にサトウキビのプランテーション農業がおこなわれ、460年に及ぶ長く苦しい時代が続いた。
- ◆ そこでは植民地は自国の繁栄に対する返礼との認識から、本国に「生みの親を杖柱とも頼み、利益はまず親に捧げる」との義務を課せられ、労働と搾取を強制され続けた。  
...ウィリアムズは「砂糖と奴隷」という言葉に、どんな思いを込めていたか考える。

# アフリカを犠牲にした人類の罪

500年に及ぶ奴隷貿易と200年の植民地化は、アフリカの労働人口を激減させ、奴隷船で運ばれた黒人は1,500万人にも達し、今日も内戦や飢餓が続く背景になっている。



## 世界の飢餓状況

世界の飢餓人口は2008年に約4000万人増加。



多くの奴隷が連れ去られた地域は、今日のアフリカでも最貧地域」(ネイサン・チェン論文)と言われるように、ウイリアムズは「産業革命は黒人奴隷の血と汗の犠牲による」と強調、砂糖植民地トリニダード・トバゴに留まらない、先進国への植民政策と奴隷労働、貧窮の連鎖、人類への罪への告発、怒りが込められている。

# 砂糖はなぜ貧困をもたらすのか

- ❑ サトウキビ作は植え付けから収穫・生産に1年と長期を要し、資金力のない農民は借財に頼り、搾取の対象に陥りやすい。プランテーション農業は収奪型であるため、地力の衰退が病害虫発生を招きやすく、労働酷使や栄養不足で病死が多発しやすい。
- ❑ 砂糖プランテーションがもたらす労働層への負の遺産・貧窮は、時代を超えて連鎖する。
- ❑ 今日的にもフィリピン・ネグロス島は一大砂糖生産地で、収穫期になると、近隣の島々から季節労働者が家族でやってくる。「サカタ」と呼ばれる彼らは、乾季の炎天下、1日50ペソ(135円)の報酬で酷使され、家族が食べるコメを買うのがやっとの貧窮を強いられている。



かつて文化のバロメーターといわれ、豊かさの象徴だった砂糖。いまは健康志向で消費量は減り続けているが、それでも日本では1人当たり15.3kgが消費されており、比較的廉価で提供されているのは、生産地の低賃金労働者の犠牲による。



**搾汁風景の類似** 左は南米と見られるサトウキビの搾汁風景。右はトカラ列島宝島で1973年撮影。奄美では1811年、柏有渡が木製の2倍の処理量を持つ鉄製ローラーの砂糖車を開発したとされているが、同様な技術が古くから南米にも存在していたことが図で分かる。

## ウィリアムズの苦悩と 重なる奄美の歴史

トリニダード・トバゴと同様な歴史を辿った地域が日本にもある。鹿児島県奄美群島で、1609年の島津氏の琉球侵攻時に直轄領化され、稲作に代わってサトウキビ栽培を強制、「砂糖一色の島」に変容した。時には7公3民の重租は、滞納農家の豪農への身売りを発生させ、人口の3割もが債務奴隷ヤンチュに転落した。この「砂糖地獄」下では徳之島で宝暦5年(1755)3,000人の餓死者が発生。その後も苦難時代は明治10年まで250年以上も続いた。

## 「砂糖」から「出稼ぎ」への顛末



■奄美は江戸期、日本最大の砂糖生産地だった。

■薩摩藩は財政の慢性的窮状を奄美の砂糖専売化で解消、幕末には軍事で雄藩となり、明治維新の立役者になった。

■しかし、その代償として島民の疲弊著しく、凶作や飢饉、伝染病で餓死者が続出。潰れ村や一揆が発生、重租に苦しむ農民は豪農に身売りし、約3割が「ヤンチュ」と呼ばれる債務奴隷に転落した。

■明治政府は解放令で奴隷解放を命じたが、奄美では明治中期も解放されず、近世の貧窮が近代に継がれた。

■与論島では台風による被害による飢饉が生じた明治32年、奴隷的立場の1,200人が、三池炭鉱で人夫として集団移住、搾取と差別に苦しんだ。

■以降、奄美では飢饉のたびに貧窮者が排斥され、東洋のマンチェスター・阪神へ出稼ぎしたほか、海外移民が相次いだ。



# 大正恐慌で 「根こそぎ出郷」

近代、日本の農漁村からは出稼ぎ者が相次ぎ、都市労働層を形成するが、奄美のそれは「根こそぎ出稼ぎ」とでも呼ぶべき年間4～5万人、奄美の全人口の2～3割に相当する夥しい島外への脱出劇が続き、戦後の一時期までもこうした傾向が続き、今日の地域衰退を招く結果になっている。



第一次大戦後の戦後恐慌は農産物価格の暴落で、東北の子どもの身売りが相次ぐなど農村部に深刻な被害をもたらした。同様、奄美でも砂糖価格と大島紬の暴落で「ソテツ地獄」を呈し、職を失った島民は、阪神・京浜へと出稼ぎした。

中でもキビ作地帯の徳之島では、食い詰めた農民が先を競うように出郷、昭和2年の調査だと13,951人が流出、亀津村では人口の58.4%に達した。

神戸では川崎、三菱重工の職工として活路を拓くが、出稼ぎ家族は工場周辺に集住、独自のコミュニティを築いた。



奄美は無出稼ぎ者は阪神工業地帯などで蔑視、排斥にあった。  
言葉や生活文化が異ったことにもよるが、同時に国家主義的な時代傾斜の中、純血主義の機運が高まり、辺境の奄美・沖縄島民はい民族視された。同時に初期移住者が教育とも無縁で、飢饉時に島内圧力で排斥された極貧層だったこともあり、都市住民から賤民扱いされ、貧民街の一角に身を寄せ合うしかなく、「特殊労働集団」として蔑みと嫌悪、排斥に生きる「二重の疎外」に苦しみ続けた。



### 南島出稼ぎ者の「二重の疎外」



奄美

飢饉の多発と餓死  
人口増による口減らし  
貧農層排斥で農地難解消



都市

少数・辺境への異端視  
侵略主義の民族差別  
貧民の社会的排除



# 第1回 唄の世界の近代奄美



唄の中の近代奄美①



## 島原の子守唄

へ おどみや島原の  
 おどみや島原の  
 ナシの木育ちよ  
 なんのナシやら  
 なんのナシやら  
 色気ナシばよしょんかいな  
 早よ寝ろ泣かんでオロロンバイ  
 鬼の池ん久助どんの  
 連れんこらるバイ



**島原の子守唄**（しまばらのこもりうた）長崎県の島原半島に伝わる子守唄。島原出身の宮崎康平が、初妻が家出し、一人で子育てをしていた頃、歌って聞かせていたという。この子守唄をベースにして宮崎が作詞・作曲した歌謡曲。しかし、後に本作は山梨民謡「甲州縁故節」を原曲としていることが判明している。だが宮崎は盗作疑惑を頑なに否定し続けた。歌は島倉千代子、ペギー葉山、倍賞美津子らがレコーディング化し、ヒットした。

## 宮崎康平

(みやざき・こうへい、  
 1917-1980) 昭和時代  
 後期の作家、経営者。早稲  
 田大卒。父の事業をつぎ  
 南旺土木社長、島原鉄道常  
 務。一方で執筆活動にも  
 取り組み「九州文学」同  
 人。昭和25年失明するも  
 妻和子の助力で「まぼろ  
 しの邪馬台国(やまたいこ  
 く)」をあらわし、一大考古  
 学ブームに。42年夫妻で  
 第1回吉川英治文化賞をう  
 けた。昭和55年3月死去。  
 62歳。



「島原の子守唄」は、天草地方の少女たちが、子守り労働の辛い心情を歌に込めた「五木の子守唄」同様の歌だ。

そこには貧しさ故に、「からゆきさん」になって海外に売られた、姉や仲間の恐怖、憧れ、悲しみが織り込まれている。彼女たちの出稼ぎは、海外拡張期日本の国家の犠牲者でもあった。

## 握り飯代で売られた 「からゆきさん」の薄幸



『「からゆきさん」とは江戸末期から明治、大正、昭和まで、海を渡って外国(唐天竺)に働きに行く人々を指す九州の言葉でした。ですが、やがてそれは海外に売られゆく日本女性の総称に転じます』(評論家・斎藤美奈子)

より具体的には16歳前後の娘が娼婦として貧しい家庭の犠牲になって売られ、異国で薄幸の生涯を終えることを指すが、天草、島原の「からゆきさん」たちは長崎港、口之津港から海外に売られ、1889～1894の5年間で3,222人が密航しており、その総数は「数万人」と言われている。そのほとんどは家族に送金するも、帰る者は少なかった。





口之津港は大牟田・三池港の築造まで石炭積み出し港として栄え、外国船に石炭を満載して日本のドル箱的産業だった。

～山ん家は火事げなばい

＞ ＞

サイパン船はヨーロン人  
姉しゃんな握ん飯で

＞ ＞

船ん底ばよ しょんかいな  
泣く子はガネかむ おろろんばい  
アメガタ買ってひっぱらしよう

## 「からゆきさん」と「ヨーロン人」の出会い

歌の三番に登場する「ヨーロン人」とは誰か。他ならぬ奄美群島の南端・与論島民だ。彼らは明治32年、暴風雨による飢饉でシマを追われるように海を越え、口之津港で外国船への、石炭積み込み人夫の過酷な労働に従事した。その哀れな姿が、密航する少女たちに捉えられ歌の一節になった。歴史は皮肉にも末端の出稼ぎ労働者を引き合わせていたのだ。

## 「ヨロン人」という言葉が含み持つもの...

### 厳しい差別に 晒された与論島民

学生時代、博多に帰省すると、家の裏の空き地に小さなバラック小屋が建っていた。中年男性が寝泊まりしていた。父が「あれはヨロンだ」と言った(福岡出身者の2016年ブログから)



#### 人権問題に詳しい新藤東洋男の指摘

「ヨロン、ヨロン」。この言葉には、三井独占の街・大牟田においては、一種独特の意味を含んで使われている。それは「チョーセン、チョーセン」と朝鮮人に対する人的差別と軽蔑をもって呼びならわしてきた日本人の朝鮮人支配者観と全く同じ感情をもって呼ばれてきたのである。またそれは、「特殊部落」として一部の日本人を蔑視し、差別して来たものと全く同じ感情を含むものでもあった。





唄の中の近代奄美②





## 徳之島一切節

〜きばてい行ぢいもれ 指折てい待っちゆさ  
徴兵いちぢか わ二人加那ぐわ...

〜吾二人談合ぐわしゆて名瀬かちひん逃ん  
ぎろや  
名瀬やシマ近かさり 鹿児島ひんぎろや  
鹿児島むまだ近かさり 大阪ひんぎろや  
牛売てい馬売てい鶏売てい山羊売てい  
ひんぎろや

島唄「徳之島一切節」は「青春の恋歌。母間の成ちよと仲間が歌い広めた」と仲宗根幸市『しまうた百話』にある。

一切(ちゅつきやり)とは小さく刻んだ一節のこと。簡潔な節と軽妙洒脱な掛け合いが人気を呼び、浜遊びなどで広まった。日露戦争で名瀬に徴兵検査に行く、恋人の想いを歌ったものや、後の大正不況で大阪への駆け落ちを談合する、リアルな歌も登場、一大ブームになった(『更生の伊仙町』)

奄美近代の貧窮化の最大の要因は、黒糖生産の植民地的扱いを受けたことに拠るが、大正の戦後恐慌はサトウキビ作に依存する、奄美の脆弱な農村構造を崩壊させ、島外流出を加速させた。



## 大正恐慌…行き場ない島民

奄美の農民はまず島の邑都・名瀬を目指すが、大正初期まで「大島紬」産地として好況に沸いた同地も大正不況でしばみ、やむなく多くは開設された大阪商船の関西航路で阪神工業地帯へと逃避。しかし、大都市もまた不況の影が濃く、短時間で帰郷せざるを得ない出稼ぎ者も4割近かった。

島唄「徳之島一切節」は、そうした奄美農民の流浪化を、恋人同士の愛の逃避行に仮託してユーモラスに歌ってはいるが、内実は行き場のない島民の、苦しく、やるせない思いが込められ、島民の心をつかみヒットした。

# 奄美人と「大阪」

奄美の近代との接触は、悲惨なものだった。それでも生存を賭けて海を越え、出稼ぎ・移民の列が戦後も続いた。志半ばで挫折、帰島したものも少なくないが、いまも2世を含め40万人とも言われる移住者が健在で、各界に進出、関西を中心に活発な交流が続いている。

## なぜ奄美人は「大阪」を選んだか

- ◆ 戦前の本土移住者の分布は①関西40%②関東20%③鹿児島10%④その他—とされている。
- ◆ 関西は明治の殖産興業で「東洋のマンチェスター」と呼ばれる工場建設が相次ぎ、紡績や造船・鉄鋼など重工業分野で労働力需用が急拡大した。
- ◆ 明治末、大阪商船が沖縄—基隆線を開設したのに続いて、大阪から鹿児島—名瀬—奄美各離島便を就航させ、大正期になると一般島民の利用が活発化した。
- ◆ 県庁所在都市で、最も身近な鹿児島への移住が少ないのは、藩政期の圧政に対する嫌悪、離島民に対する差別意識のためと言われている。
- ◆ 関西においても差別が付きまとったが、反面、都市生活への憧れ、関西人の庶民性が支持され、移住・定着志向に繋がった。

